武藏多磨名所圖會 二

二

ル 4
245
2

特
ル名
門 号 245
巻 2

武蔵名勝圖會

多磨郡之部 巻第二

目録　武蔵野新田　村山郷　山口領

小金井櫻　武蔵野墾田　武野跡　逃水
桜山　向ヶ岡　村山川　柳瀬川
久米川　堀川　尊氏将軍宿陣跡　梅岩寺
天王森　正福寺　貞和ノ碑　元弘ノ碑
将軍塚　八國山　不動森　南秋津村
悲田處跡　應永の碑　圓乘院　陣屋
小澤の池　芋窪村　鹿島社 古棟札 縁起　慶性院
観音堂　村山郷　村山党ノ祖　村山支流
中藤村　真福寺　薬師堂　蛇堀川

村山茶器系　善聖寺　観音堂　殿ヶ谷村

阿豆佐味神社　福正寺　観音堂　箱根ヶ崎村　筥ノ池

圓福寺　蛇喰次郎　加宮晃忠古墳　狐塚

産物

小金井櫻

武蔵野新田の内小金井新田の地にあり小金井橋とて玉川上水の橋あり此橋の前後上水の両岸一里余の間桜あり古樹の山さくらなり南ハ野中鈴木溜井小金井梶野等の新田の地なり北ハ廻り田野中鈴木是政等野境等の新田凡九ヶ村に繋り開花の時ハ芬芳繽紛として落英爛熳たり是を望む事なおし　近き頃より東都より花を愛し風景を好める遊覧の雅客等遠きを不厭して旅亭なと携へ来りて遊観するもの多し　高貴の人も駕を促して足を労させ此地に小金井名花といふ小冊子を梓行せり　四谷新宿追より五里許　府中より一里余なり

一　玉川上水端に櫻樹を植ましなハ桜実ハ水毒を消すといふ事あり依し上水堀割の患ハ奉行松豆州侯縣令に沙汰せられしより植載る也　抑上水を以都下の人民凡十百万の性命を繋る事なれは一日も絶しかたし　豆州侯の生涯に大功このなる内此上水に入ハ其大功の一ヶ条なりといふ

野火止用水（のびどめ）

玉川上水より分水し又野火止堀とも唱ふ　砂川村と小川村堺より川入艮の方へ流れ小川村小川新田又小の方ハ清水畑田野口との界を東へ流れて柳窪野火止より入間郡に掛りて夫より新座郡野火止村に注く

野火止用水と号ける謂れハ承応年中玉川上水堀割の砌より分水へ松豆州侯拙其節にて此侯の領知野火止邑三千石余の地ありこの其地の田方用水となさて水なりけれ御分水なこの一にもなし領知の用水に用ひて其残水又他村に掛りて救百ヶ村の田畑がうるおせり是に荒ても太功の餘潤なり

享保元文の頃より武蔵野新田開墾ありしより新田用水に分水すといへとも僅か

甲すに方の樋口也埓大白用水ゟ小口ハ上水ヶ十の一を引入るとそ

武蔵野墾田

天正の頃まてハ武相の地ハ小田原北条氏の領する所にして関東ハ闘争のちまたにて古河御所成氏朝臣より政氏晴氏の三代よ至りて愛領山の円翁ヶ谷並上杉氏長尾太田里見小泉笠原ゟとも年久攻合戦ありて諸てハ長禄唐正の比より日夜おもしゝ静なゝ次東の百姓を安堵する事なき八比陸の田畑ものづ荒野となりし時なき一ハ武蔵野の膳東精麻孤絡のこ多かりしが天正十八年江東 上の御徳澤に浴し新墾の地寛永の頃より後も年ゝ開墾して今ハ原野荒茫たる所なく元禄より明暦後近ゝ開けたるハ古新田として何村とよび享保元文の村々と称れる地を武蔵野新田と唱ふ凡八十ヶ村狛と直是ハ多摩入

小金井邑

畢竟万の樋口なり野火留用水なれば上水の十ヶ一を引入るとそ

武蔵野墾田

天正の頃迄ハ武相の地ハ小田原北条氏の領するといへども三代
關東のちまたにて古河御所成氏より義氏晴氏の三代
なりて鎌倉山の内扇ヶ谷両上杉并長尾太田里見小弓北條戦争
ありて殊に長禄康正の頃より日夜少も穏なりし東国の農民居を安堵する
なく是れ小濱の田畠なのつらなり荒野となりし時なきにも武蔵野の曠原狭藤秘路
のミ多かりしが天正十八年以来　上の御徳沢に浴し新墾の地寛永の頃より
始て年々開墾して今ハ原野荒蕪たる所なく凡寛永より明暦後迄に開けた
るハ古新田と号して何村こまび享保元文小村落となれる地を武蔵野新田と唱ふ
凡八十ケ村猶是ハ多摩入間高麗新座の四郡にあり　御入国以来開墾新古の
へ大抵二百ケ村余もあるべき也是も先年水道を開きたるゆへ農夫耕作のいとなミ
も出来郷夕の用水其村々へ達せざる所なく村民実に水利をはたるの田へ各居を安
ずるに至れり享保の頃より上水を分ち八方へ引入る分水は三拾九ヶ所あり
こりて是皆武蔵野新田に分てる水道にあり

武蔵野

名所方角抄に端奥より奥州へくだるに先むさしの出逢武蔵野へ
沙あ所は如何ぞ下より六里あり一國都なりて地之とこ地名にハ

古へハ十郎小蹟まてといひ西ハ秩父ハ名におふ武蔵野ハ月の入べき
山もなしといへハ手をもそくもそく見れバ蓁莽成立て文蓁蓁なりしな
玉の稲毛葛西或谷岩槻河越誘草怒なとも云ハ武蔵野の内
まて侍るとかきてハ多摩都筑橘樹荏原豊島新座入間高麗
足立崎玉までして地名考の説の十郡とすれバ足立崎玉城陸か
比止稀にをかゆるなりん小國紀行に云箕田とハ不なあらして
武蔵野ハ分侍るにもかきハこの箕田ハ足立郡之又東路の法と
云神祇後立て須賀谷とハ不るに小泉掃部助か宿るに逗留
しむさしの昔の中径なりしといふハ比企の須賀谷村なり
又其郡中野本村といふ不ニ野本寺と号ける古刹もありて古へハ
武蔵野の地なる事を伝へされバ十郡の際も踏らし本なし

太平記に古八百里ありし其広大なるをいへり千年まて南紀に
入るべく作り勝景の地多かりしを行旅のたつきとして天長
のむかし西紀の界に悲田所並立し来れり左大将家入間郷
小野しけみて武蔵野の内なり其後は武蔵野は荒野を開墾せ
画に来て成乗地となき邑里をなさしめ開發の田成本地をつけ
し来りし見え南部に係る所にまして広かりしと伝へる事ハ
武蔵野は古跡数多なりしは悉く見分も及ひかたきと其大半名
高ける歌のふし蘇に出たり逃水の流てさるへく他りて其所定
同しけるなれとも堀かねを見て古跡のもとをたづねまつる武蔵野
の雅に紫をよみ香高るハいにしへ南部より紫根を産せし
事延喜式に出たり
交易雑物武蔵出紫草三千三百斤とあり

東鑑云元久二年三月武蔵國荒野等可令開發由可相觸地頭等被仰
廣元奉行之云々同云武蔵國多磨郡荒野等左近大夫政書依承久之賞
拝領所也云々

西行
撰集抄 又云 西行物語にも見へたり

武蔵野のおくにわけ入る程におほろなる露にやどる月も見えてこゝと
風に玉ちりて小萩がもとのむしの音いとかなしくむさし
野の草のゆかりの我も荒川袖のしなつかしく覚えて八月ふ
うすきにて行ものの在所にながめんと思ちつゝわけてゆく程にみち
より五六町もしいりてまへしとぞくだりすゝきかくしたる人里ハ
跡すへきてに庵をむすびてそすこしにあやしとおもひて尋
ね行て見入てみれハ年のつもりなりける庵のうへをいはらすゝきや

まてらき萩なと千しはらくの秋乃草まて色々うゑ囲ひ
物ふす所をかへてうらひの門とのを折しきふしのうへ小
高ぞう善賢なるは法華經まうつり中まへには法花八軸をほぞ
かにまつり庭には千草の花露よかくされむしのこゑく
所にふにおきまよいはこそとよふ人てはしりはおほくは
かよひしたへよるいかりのうらは是は生きはから
庭にはぬきすりすゑにハ露をたえたる老僧九十有余と
おかへたるが在於閑雲深掃其心とよみすてまつる
す　仙人なとうてすやとおゆしく思ひて八月十五夜
名よたりとね月のうけならん法くのかくきすてしのふ

庭ならかくておしけ行あとよりてまへに侍る生ともたちに
あれはたれなるそ揃しの種を御名久しくあまく
あまりいかなる人のかくてハおハすらむ中んと問ふせそおほす
る事なし　かさ得て我は古き経のかとうのとふなり侍りつまきん
うゆふしくて中程りしろ　むさし野に花の宮里に
てきしょうりも行人に尋ねて見ゆけ入ると聞に思ふ先
人すむうそくきなとうなりときくなにをけたる中を
井よりいましての所もしておもしくかんとうえ老僧都
芳門院乃侍の一族にて侍りしか女院かくきさせ給ひて
のち出家して国々修行ありしの師く仏の御ゆかりの

かくて小笠原にありて二十九の年よりすでに六十
余年此まて詠出されしうたの数七万余部也
なりとかゝれる西行し郁芳院の筆にもまされぬ筆にて
ハ堂らひにかなふこともなきとをしたゝめ名残おしく猶
に絶えし あの川おもりて立ちるとそ
いかて我ききよくもなふぬまとありて仏乃月花ほとゝきすをよまん
いまハへまき世をいふとそ世をすてそあはれの世にハ住みかね
秋をまちて木の葉の名なりしを お知しも弁ふ月ハさえわたるとも

万葉
武射志野爾宇良敝可多也伎麻佐手爾毛（ムサシノニウラヘカタヤキマサテニモ）
乃良奴伎美我名宇良爾低爾家里（ノラヌキミカナウラニテニケリ）

仝
牟佐志野乃具奇我吉藝志多知和可礼伊（ムサシノノクキカキヽシタチワカレイ）
爾之與比欲利世呂爾安波奈布與（ニシヨヒヨリセロニアハナフヨ）

仝
古非思家波素手毛布羅武乎牟射志野乃（コヒシケハソテモフラムヲムサシノノ）
宇家良我波奈乃伊呂爾伊豆奈由米（ウケラカハナノイロニイツナユメ）

仝
伊可爾思氐古非波可伊毛爾牟射思野乃（イカニシテコヒハカイモニムサシノノ）
宇家良我波奈乃伊呂爾低受安良牟（ウケラカハナノイロニテスアラム）

仝
武佐志野乃久佐波母呂牟吉可毛可久毛（ムサシノノクサハモロムキカモカクモ）
伎美我麻爾末爾吾者余利爾思乎（キミカマニマニワハヨリニシヲ）

全

和我世故乎安杼可毋伊波武牟射志野乃宇家良我波奈乃登吉奈伎毋能乎

古今　むらさきの一もとゆゑにむさし野の草はみなからあはれとそ見る　よみ人しらす

後撰　女郎花にほへる秋のむさし野はつねよりも猶むつましきかな　紀貫之

古今六帖　春はまつあつまよりこそ若草のつゆてむさし野原　よみ人しらす

続古今　紫の一もとゆゑに万代をむさし野にこそ君むつるなし　藤原家隆

家集　むさし野にむらさきあれは紫のその色ならぬ草もむつまし　小野小町

家集　むさし野の若葉はまさる衣手のみなもとのゆかり知られし　在原業平朝臣

伊勢物語　むさし野はけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり　読人しらす

大和物語　行きて見ぬ人もあつてむさしのゝ草はたにかくそおもかくる　源宗于朝臣

家集　むさし野の草葉にやとる露のかく世にあるほとのはかなくに　伊勢大輔

新勅撰　むさし野は袖ひつはかりわけつれと若紫の色のかきりそ　九條右大臣藤原師輔公

家集　ゆきて見に春の霜枯しむさし野は草葉かれゆくまきしより　壬生忠見

家集　むさし野は霧のたえまに見わたせはゆく末遠き心地こそすれ　平兼盛

院百首　緑なきむさし野原の霜も冬枯てゆく色深るむさし野の原　後鳥羽院御製

続古今　いつまてそこの家のゆかりとも思ひはらはむむさし野の原　土御門院御製

百首　武蔵野の花のうへに露みちて千草の色をみかく月影　鴨長明

夫木　むさし野は野への草葉はわかくて春ことに縁の色まされに　藤原有家朝臣

建仁十首　わけくらす人もおける月のゆくすゑもまくらかるなるむさし野の原　藤原定家朝臣

堀川百首　むさし野はつゆぬきとめぬ白露の末は尾花に月そ宿れる　同

新拾遺
さひしかれ松宇の菊ゆしに?なきハ塙山なれむさし野の　前大納言

夫木
むさし野ハ草のはらにわかれて入る峯も月そさらぬ　同

千五百番
若なつむゆかりに見えハむさし野ハ草ハ萌らむ春雨の空　藤原雅経

正治二年百首
紫のゆかりと見えて武蔵野の菫の色よなつかしきかな　藤原経家卿

夫木
主ぬ色につまこもらぬ武蔵野の紬をハたゝきよ志のせ すむ　寂蓮法師

夫木
むさし野やかれにし鳩に志るし秋の露ハそ深い露の我のおきし　順徳院御製

宝治百首
みどりなる松のひとつの若葉に秋めくらむ武蔵野の原　同

家集
むさし野は駒迎へや関山乃こえくらしにて今は来つらん　源順

夫木
紫わし野の昔ながらの萩をこそ植て花のねとこそ此秋の　大中臣能宣朝臣

拾遺
むらさきの色よハさくれむさし野の草のゆかりと人もこそしれ　如覚法師

実方朝臣集
かこつ色に人もなれせ武蔵野の若紫を何にたとへん　文敏

源氏物語
ねは見ねと哀とそ思ふむさしのゝ露分わふる草のゆかりを　読人志らず

新後撰
行こゝろ行末も無き限りをそ月みつへきむさしのゝ原　源師信朝臣

堀川百首
むさし野ゝ花まやかに出入ぬそ月も出かゝるひけ　源師頼

家集
むさし野ゝゆかりの花のいろと哉咲なるなるすゝき　藤原顕季

堀川百首
武蔵野よわか志のひし若草は結ひ初つと人やしるらん　藤原仲実朝臣

旅人のゆくへとも見ぬむさし野ハ草きくふかく成りにけるかも　藤原顕仲朝臣

むさし野ハあしたの萩そ露そふゆくもする花見ゆる　源俊頼朝臣

新勅撰
玉にぬく露ハこほれてむさし野の草の葉むすふ秋の初風　西行法師

霞をや煙とみるらん武蔵野ハ書きこもれる雉子なくなり　源兼政

むさしのゝ霞も花のたのつゝしくまる時ぞまさりける　藤原清輔朝臣

新古今
ゆく末は空もひとつのむさしのに草の原よりいづる月かげ　後京極摂政良経公

夫木
藤袴ほころびぬらしむさしのゝ若紫の色にしみつゝ　藤原俊成卿

拾玉集
むさしのゝ草むらにかゝる早蕨をよる紫の塵かとぞみる　慈鎮和尚

建保名所百首
行く方もなき袖に稲葉のゆかりは紫のむさしのゝ原　藤原家衡

家集
むさしのや草のゆかりに秋風の雲に露ちる月の空　藤原俊成卿女

建保名所百首
緑なる春をもそへの若草に煙たえてそむさしのゝ原　順徳院御製

思ひやる行末は遠きむさしのゝはてなき野辺にせはき秋哉　兵衛内侍

月とおなし光とおもへむさしのゝ末はこそ草の露の空　藤原忠定朝臣

むさしのや浅茅いろ濃く今よりや荻さむの夜かはりし吹らん　藤原知家朝臣

続古今
武蔵野ハ行末もなかなか霞てみる山の端の月　同

むさしのや月かけさむし時雨けり尾花か末への露の下紐　藤原経綱

家集
むさしのや行人の行へもなし月の光そ草の白露　藤原光経

新勅撰
むさしのや人の心のいかさ露につゝみぬとめぬ袖の玉　前関白道家

新千載
むさしのや草はいかなる露に来るかゝ月はいかなる　東三条院長子

夫木
むさしのや知らしやまへ時雨おのか行へき山もあらし　洞院摂政家教実公

新古今
むさしのやゆけとも秋のはてそなきいかなる風の末に吹らん　久我太政大臣通光公

続古今
むさし野ハ月の入へき山もなし尾花か末にかゝる白雲　源通方卿

千首
むさしのやまつ萩原のつまこめて庭へ立つくは細霞は　藤原為家卿

むさしのや都を山に見しころの浅茅の末なりて月をみるかな　同

新拾遺
いくへかきりも見えぬむさし野や行ゆききりの空のはての雲　後嵯峨院御製

續後撰
行くれて今夜やねるとむさし野の草とたゝえてあすへかへりけり　隆命師

續古今
むさし野やそこそしられね忍川の山郭公たちくなかなり　藤原教氏

夫木
逢人は見えとかくれぬおなし名のゆくかたならぬむさし野ゝ原　後鳥羽院下野

夫木
ほりかねる井とのみ見ゆる武蔵野はちえあさみなしの浪の下草　後九條内大臣基家公

新續古今
武蔵野は末こそなく限なく草くきにかゝる旅はしられて　藤原為定卿

あつま路の足柄越えてむさし野の山へたてぬ月ならなくに　藤原時朝

夫木
春雨にみえしとならんむさしのや青むかれ淺のかきの焼たち　土御門院小宰相

歌枕名寄
郭公一こゑゆえてむさし野の花をなかりてきなくなる　山階入道左大臣
藤原実雄公

新後拾遺
夕煙立へき里の志るへかとまたきゆるかなるむさしのゝ原　藤原經朝臣

風雅集
むさしのゝみな冬草の志をれきにかれはゝ霜ぞ添へ枯葉　安嘉門院四條

新千載
草枕おなし旅寝の床ならねは日数ふるとぞ武蔵野の原　藤原為継

玉葉集
出てまた入へきかたもなし武蔵野の花を分へ秋の夜の月　能海法印

夫木
武蔵野や葦かたかた分みんかきりしられぬ名やはそむきと　藤原為実

續後拾遺
むしの根をわけきみしえ白露も尾花はしくむさしのゝ原　藤原長秀

續千載
むさし野や入る月の岸の草ふかきをは空に久しき秋の夜の月　久明親王

新後拾遺
草枕ゆふ旅寝はかさねてもまくむさしのゝ末はるけき　源親康

夫木
むさし野は山の端志られぬ名とまもむしの根はなとそ見えける　最信法師

わけ来てたゝへは志ら雲なるくと山をみて見へぬむさし野の原　藤原業親公

建保百首
武蔵野や草はみなからおく露のゆふかけもとむる袖の秋風　行意僧正

建保百首
むさしのゝ霧のまよひのかこち草妻こもるまて煙とみゆる　藤原範宗

新千載
打むれて千かきりそ知らぬむさし野やとけゆく神の名残　藤原定資朝臣

新後拾遺
東路も古里なりし武蔵野の空行月の影やまよはん　等持院贈左大臣

新千載
いつくをかすゑとは定し山の端は涛てもみえぬむさしのゝ原　源知行

果しらぬ草のたくひとむさし野を分遊すゑもわか袖　藤原雅家

草庵集
むさし野や月影かきりに宿りハなくてや草の枕むすはん　頓阿法師

新後拾遺
むさし野をさ行ても行る日数かや不二の根遠く見えしあけほの　宗久法師

新拾遺
分ゆかむ花の千種のはても無し秋をかきりの武蔵野の原　藤原行春

新後拾遺
行末ハ露たにおかし夕立の雲も行きまむさしのゝ原　よみ人志らす

夫木
武蔵野の草にそいる葉の露のゆかりと思ひ知けり　同

玉葉集
旅人の行さきに猶見えて迄行ともつきぬむさしのゝ原　前大僧正道玄

新続古今
今ハ又さて分もかきりもなくてはむさしのゝ原　源兼氏

むさし野ハまた分もせぬ果なくて行末もあれや旅の草の枕そ　よみ人志らす

夫木集
武蔵野や一葉先立秋風に千種の色や根よはるらん　源将資

行これは別れてよりハ武むしのゝそれをみは空なるのかまり　同

釋宗久都のつとに云むさし野を分て行たよりに其夜はたは塚の侍らとあやしけなるしつか庵にかりそめの枕をむすひてとまり侍りしかとこの野ハむかし盗人ありてとりふしたりけるにやきそと読きんりと定めて中と思ひしに草の衣をさへこきてこましこ波のたそらしかりしなともいふ旅の床もわすらくして侍りしか

いとゞはいかゞ晴しやいる露の身のうきまに迷ひぬむさし野原

准后道興法親王廻国雑記云　文明十八年

此秋は此野にかり行していろ／＼の草の花を枕にかりしきてかし
はとらみ夢をむすひを

花ちらし草の袂濃露の百よ夢路うつらふむさしの原

むさし野は草よかゝり行の秋の萩はむすふ夢路は去にやあらん

おなしき六日雲はさゝか晴し侍りしは武蔵野にて若菜を
よとえて

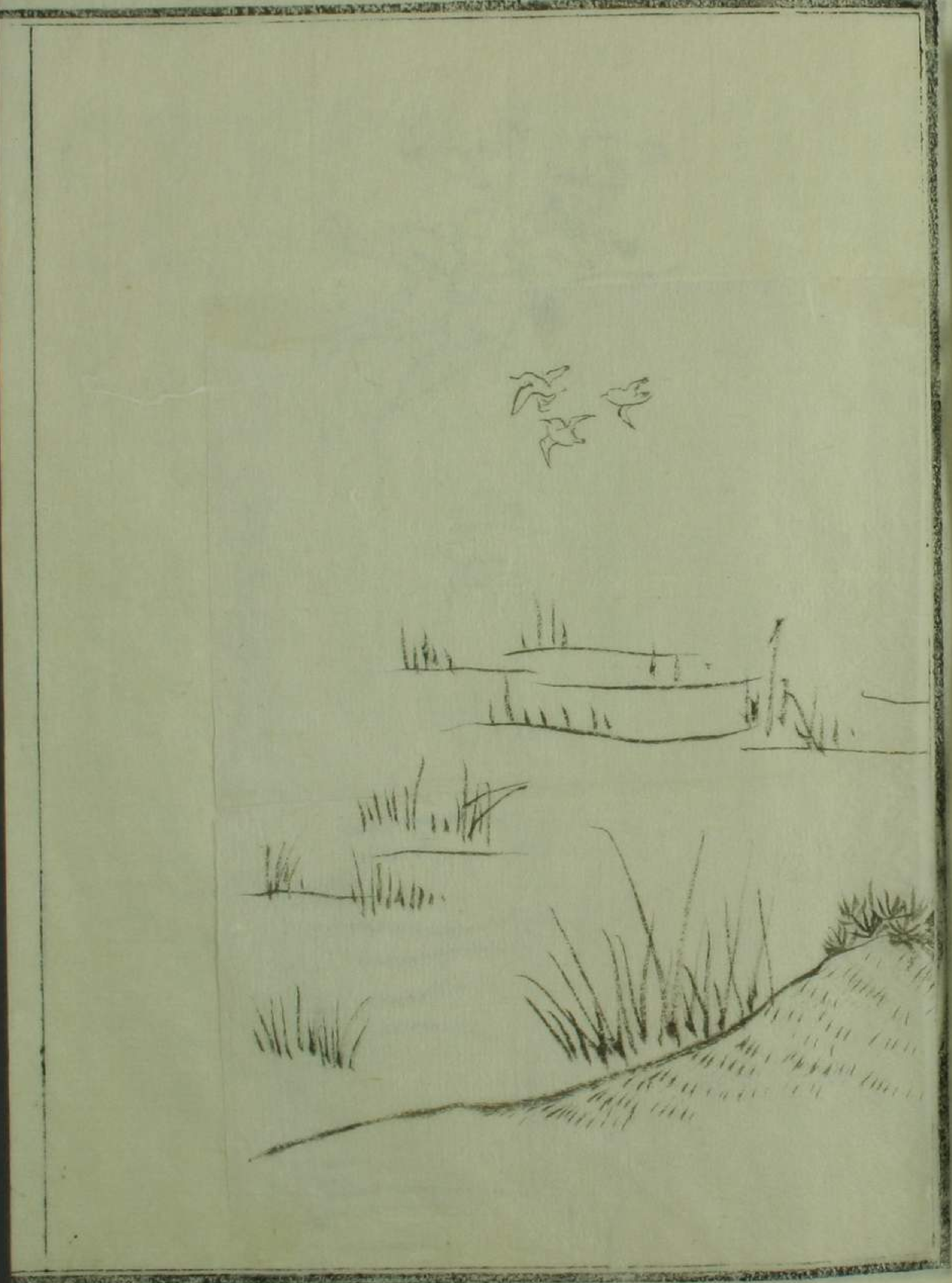
むさし野よ分まよふる行末への花も志き代のたえをと
此野を分へ行とて馬上にてある目路よ申ける

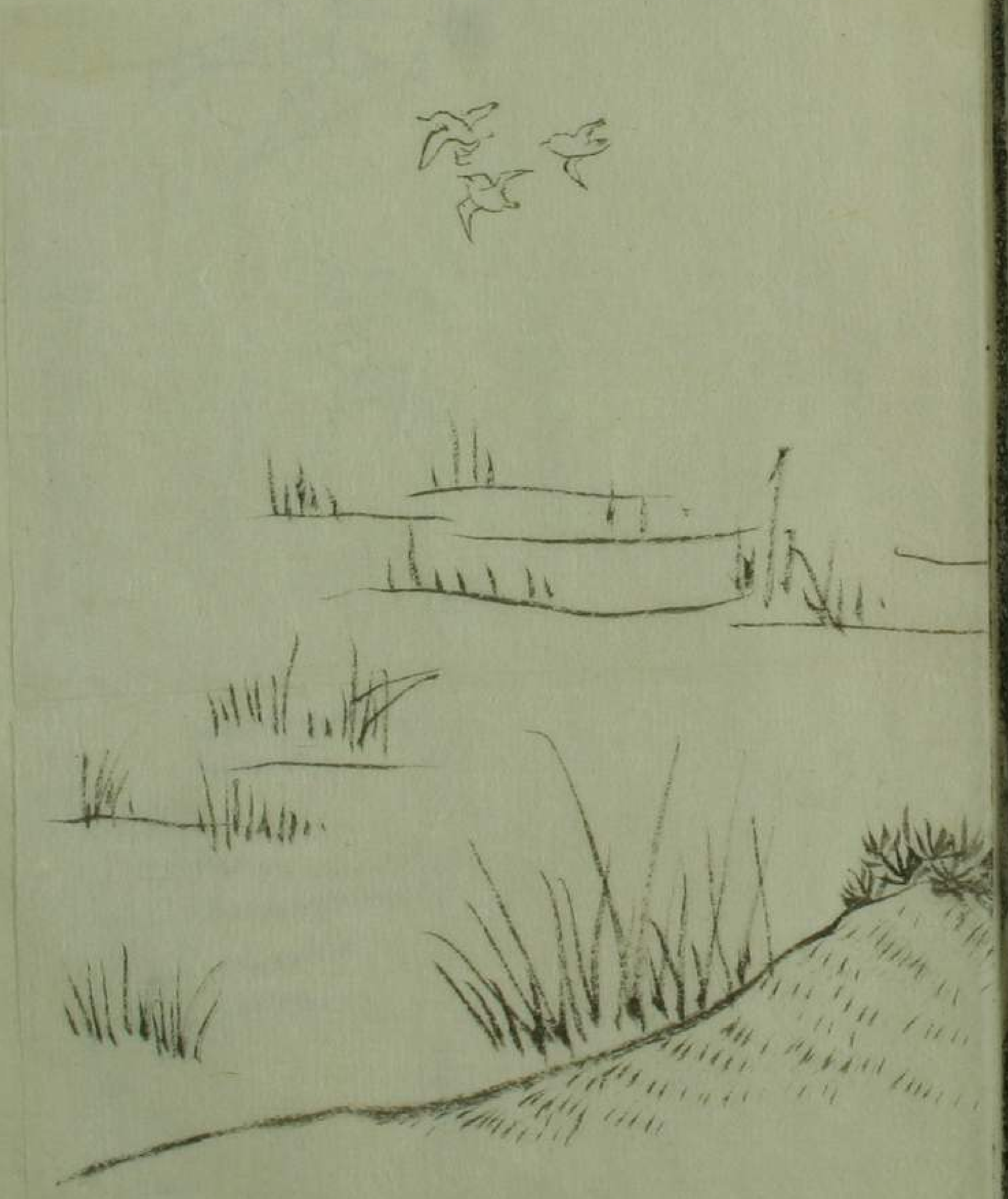
宗長よむさし行ふとをかけぬ星はさすかな夜行の野にてあつまに
むさし野よいて海なとのこそ枕ひろにもしかるて雲雀のかなと
よみて

行く草の露ともとなりぬむさし野に松つる雲雀を床もふらん

北條氏康武蔵野道の記云

天文十五年仲秋の頃武蔵野の秋にかけてむとて此某月たちひ出ち
ねる事なきを人とあまたうち連まて小倉時して行そなん
とてみおく物の装束して馬より家々の猟舟まりて行
なきこなくの古跡をかゝえ中畧それより武蔵野を物りまこ
中に行て果のありしを萩露女郎花の露まにつる虫





の齊く何と無一段もあはれなるものなり
むさし野はいつくとさして分いりしかなしえしあきは
いまし一つの草のゆかりしなれはあはれ紫のひともと
ゆゑなり 色につけなき我世の中の人にあらぬも志のゝめしの一こと
色なつかしき我世の中の人にあらぬ志のきたなき草の一もと
何くれは八月十六日頼寄はしくぬかりしてえさきかなみく
まうきて馬よまうせて何よもすの為に落ぬ滅や落葉なく
巻よ加らぬ頼寄をとゞけて入んと有さまなり

北條氏康抵?図

あはれあるきをとりまたはひまとりあり
むさし野のはつをさして行けは、むかしに見えてきえて　かなしきは
いまし（へ）の草のゆかりとなりしあれはてなりぬる葉のひともとゆかりなし
露だつなく我世の中の人あはれと思ひし志ぬる草の心とまれ
行く末を八月十五日鎌倉はあらく晴らしてさたかにみへし次
馬をまねかせて行くさ井の方よりは次は滅や鎌倉の末ふかく
鎌倉をさしけ入んとある事あるべし

去程に新田太郎義貞ハ元弘三年五月十一日先勅より綸旨を帯しかハ虚病
して本国へ帰り一族をまねし同月八日の卯の刻に生品明神の前にて旗
を揚綸旨を開きて是を拝し笠懸野へ打出らる相従ふ氏族にハ大舘次郎宗氏
子息孫次郎幸氏次男弥次郎氏明三男彦二郎氏兼堀口三郎貞満舎弟四郎
行義岩松三郎経家里見五郎義胤脇屋次郎義助江田三郎光義桃井次郎尚義
是等を宗徒の者として百五十騎にハ過さりけり此勢にてハいかゝと思ふ処に其日
の晩景に越後の一族里見鳥山田中羽川の人々二千余騎にて押来る又甲斐信
濃の源氏其勢五千余騎にて押来る同九日武蔵国に打越へ紀五左衛門足利殿の御
子息千寿王殿を伴ひて二百余騎にて馳付たり是より上野下野武蔵の兵共
朝をまたさるに集り侍ひて馳付て其日の暮方に廿万七千余騎にて打立たりされハ
四方八百里に余れる武蔵野に人馬ともに充満して身を峙るに所なく打囲ミたる
勢なれハ天に飛鳥も翔事を得ず地を走る獣も隠れんとするに所なし草の
原より出る月も馬鞍の上に出て鎧の袖に傾きけり尾花が末を分る風ハ旗
のかけを翻し[illegible]偃の手静まりて鎌倉にハ京都へ討手を可登事ハ治
定て新田殿退治の評定ありて同九月軍律定して一方へハ桜田治部大輔貞国を
大将として長崎次郎高重同孫四郎左衛門加治次郎左衛門入道に武蔵上野両国の勢六万
余騎を差添へて上路より入間川へ向らる是ハ水沢を前にあてて敵の渡らん処を討
とあり[illegible]源氏ハ同十五日の辰の刻に武蔵国小手指原へ打臨ミ給ふ
源氏の陣を見渡せハ雲霞の如く数万といふ数を知ずに桜田長崎是を見て馬を扣へ
へて五三時を[illegible]入間川を渡て先時の声を挙げ陣をすすめ矢合の端

をいさ皆衣涼旗をたて織りけるとぞ

逃水

逃水古より武蔵野に逃水とよみ来りし也　世に其儀いろ／＼に定る説あり　里人説に武蔵野の若草生立て　うら／＼かなる春の空に地気立て遠くより見れば草の葉末白く水の流るゝやうに見ゆるなり　其所にいたりみれば其気もなく又向ふへ流るゝやうに見ゆ　定めし所なく先にゆきて近づきがたきをもて逃水と名附たると是其理にかなへるに似たり　或は武蔵野遊覧に此説を似たる事ならず　其後武蔵野に住みぬるものゝ話を聞しに古へ数十里の曠原に七八月比尾花のうちを白く咲みだれたる時風の吹しくそこら一里も二里も平原を覆ひ　さながら水の流るゝに似たり　其所へ至りては又遠くに先を流るゝに似たるを古へ逃水とぞ称しけるにや　今その風情をみんと欲すれども数百里の曠原は悉く村里となり其儀なきを説とすることのなし　古へより地名又は四流なるとさへも今は少し果て知られぬ事多し　ましてや浪定まらぬ逃水ゆゑ尋ぬるに所なし　只むかし在りしとのみ云へるのみと語りき　然へらば今ぬるにてさて地名考に森角の地の行潦ぬるは雨の滞りたるをすぐ逃水といふは如何にや森角の比の滞るはいはれの沖まで来りて是は其中の辺なる逃水のぬきをを定て其中の有なるべし

家集
東路にありといふなる逃水のにげかくれても世を過すかな　源俊頼朝臣

一説に東なし川といふ有り　入間郡今多磨郡久米村辺よりいづる小流東へ流て同郡に至る今水野村へ入り村長太助といふ者の門へ流入て末はなしらぬ也　に是を逃水なりといふ　又一説に所沢川といふ有り　是は同郡本多郷より湧出し　此所堀口村へ流る門毎年十二月より翌二月迄水涸て流なき故　堀口村より末は涸る事なし　是を又逃水なりと古人傳へり　按するに此の湧流ある所いづくにも有るものにて　珍しからぬ説にて　堀兼井の近き地にて堀兼井といふなるべし

狭山

山口領堀口久米川迄之西の方へ村山又宮根ヶ崎村といふ所まで西郡に入る郡に峰を繞らし此辺は其裾に数村あり東西へ長く亘り凡二里半程より南北は窄き也　はや狭山といふなるべし　或云狭山のさは細なり　狭衣狭筵なとのさに同じといへる説有り　地名考に西は秩父山に続きたりなといふ大ひなる深き所なり　狭山の四境をへて山なし　秩父根へは七八里にて遠く隔てり　此山さらに土山にして古へ武蔵野曠原なりし時は原野の中にさしおきて実に眉ひきのやうにかくちなり　府中辺よりは見へしにや　武の前沢村田部に鶴木生ぬしといへる一説あり　向ふ岳は狭山の別名なり　其説は次に出す

千載
入月の狭山が峰にもと近し　その辺の星をそえりける　藤原基家朝臣

続古今
秋風になびく狭山の葛かづら　くるしやいかにうらみ侘て　後京極摂政御製

新続古今
やまし寄狭山の峰の紅衣　秋しも濡るる袖の露けき　正三位家隆

向ヶ岡

新後拾遺
ことさへも なかりし 狭山葛 かへらうらみよとのみ 秋風ぞ吹く　前中納言匡房

床しきに 跡絶えて あかぬ思ひは 狭山郎 なきたまし の嘯　同

此向ヶ岡は狭山の一名にして笹ヶ根続きの山あるゆゑ狭山と号し 夫より東へ続きし所は向ヶ岡なり 風土記に北限向岡とあるは是なり 此地名考に玉川の流を小にて西は小山田の関より初まり東は余長の里に終る 此へ丈は向ヶ岡といふ 又小山田の関より初るとあれど小山田の関はいつちにや行き その山は横山の小仏峠高尾山の辺より東へ亘り 大由木小山田辺へ続き それより日野府中辺へ整わり 末は橘樹都筑の両郡へつらなり 多摩の横山とよめるは是也

万葉集
出て見る むさしの岡の 木志げくさし 花の下ぞ 宜し　山部赤人

新葉集
むさし野は 向の岡の 草なれば 根を尋ねても あはれとぞ思ふ　小野小町

名寄
名にし負ふ 向の岡は 郭公 雲のをたてに 名のる声なし　隆源法師

御集
いかにして 向の岡の 松の葉の 月まつほどに 成にけるかな　後鳥羽院

松の葉に むさしの岡の 夕涼 秋より先に 風ぞ吹ゆく　同

新葉
夕づく日 向の岡の 露ならぬ 見わたす すゝき 秋の色かな　藤原定家

いかにして 向の岡の 草のうへの つゆのまにまに 夜のふけぬらん　同

玉吟
武蔵野の 峰より月や 出ぬらん 向の岡よ 影そうつろふ　藤原家隆

続古今
初霜の よそにや 見るまじ かたしく むさしの岡の つまる日影　藤原知家

千首
夕附日 むさしの岡の 青方松の 色ぞかはらぬ 若ち世は　藤原為家

題林抄
夕づく日 はるかや 向の岡のへに みだれて 霞の 玉藻　同

歌人四季百首
見渡せば 向の岡の 夜半は 雲かかる 駒の たえまかるらん　皇太后宮大夫俊成

夫木
出る日の いそく 朝霧 かけ 空ね 向ひの岡の 雲の 峰つきに　藤原俊実

玉葉
秋霧の 絶間にみえて 夕附日 むさしの岡は 色はさきにき　後一条入道前太政大臣藤原実雄公

夫木
夜よりても やま 春の 月 出くる 向の岡の 木蔭なくして　藤原光俊朝臣

新後撰集
秋の夜の月の影は夕くれの外にもそのうつりやはせん　源邦長朝臣

夫木
まくらしけき風の音を聞ぬるにまとろまて更行夜はの小筆　藤原乃実定

むさし野の尽ぬやたちぬる人のむかしの跡にこそとたて　よみ人しらず

村山川

此流より山口領の初より中里村あり前にて出る　狭山向岳山口領に発したる
出る先と武蔵野の名所に添して出る　山口領の内なる事領志かし　是より
西南狭山に接ちて山口領と号るハ此頃中里村の流を始りし　凡そ諸ちて十八ケ村行りて其
中野荻原々谷石畑辺に流れハ古名村山と云ふ地なり今ハ此村を村山分と唱ふ此川の水源を
村山分より出るゆへ川名とせりさミ此川を村山川と唱ふかハ中里に跡流れて新唱ふ
南秋津久米川辺にてハ砂川と唱ふ此川南流して柳瀬川に合し

柳瀬川

水源ハ入間郡鶴楽寺の谷合より流出し北に村へ来り入ると郡界の川となり東流
して同郡所沢領を中宿にあり新座郡大和田町へ東流して此所より西北

久米川村

村にて川名有之を
小名南の柳瀬川を堺として川向ハ入間郡久米村あり江戸より六里ほどあり
古き記録に来目川或ハ貢馬川又ハ久目川なとも書けり上古より
故ありて建久四年三月廿五日頼朝卿入間野にて追鳥狩の御出あり又久米川より七郎
とりか着此邦の藍にて畠山重忠の従士なり又云日蓮聖人は文永八年十月十日相模国
を出て武蔵国久目河に至り此邦にて門徒等に別れしと云ふ鎌倉古道也へ東師上
毛小諸信濃なとへハ跡をさ逝回せしあり此所へに至宇佐ま元弘三年五月新田左中将義貞上野
に軍を発し鎌倉へ向ふ時之をれを鎌倉より討手軍勢を上の路より入る川へ向ゆて
ミ付かハ此所あり其砌久米川合戦と云伝るハ此地なり

堀川

此堀の川なり清水村北に村まてハ小川と唱へ南所まてハ二瀬川と唱ふ是ハ北に村より
小流来りて此所にて合する也へあり又東の瀬村南秋津まてハ柳瀬川と唱へる不く
其名ハかつるにて此界の川なるを村名のおこれる不りて古へハ久米川と唱ひし事なりしか
今ハ川の名ハ村名に成ぬり

廻国雑記云
久米川といふ所にて里人の云ふるに井あり此川水を汲て朝夕用ひ侍るとあり

里人のくめく川と夕暮になりなハ水やこそせめ　准后道興法親王

宿陣跡

数百年の星霜を経たれハ其跡といふ所志らへ記事なし久米村の堺に将軍
塚と号する所あり是ハ新田左中将旗を建し所也又北に村と当村の界に旗塚二つあり是郷貝朝臣の宿陣
いそり

梅岩寺

青林山といふ曹洞宗前沢村洋牧院末久米川村にあり
御朱印十石也

本尊正観音 木地像 一尺許 慈覚大師作 此像異佛にして岩に
相伝へて云此寺往古天台宗にて白華山観音寺と号す武蔵野合戦の時足利尊氏公
宿陣ありて其後尊氏公造営し給ふ夫より関東礼世由緒て退転せしを
御入国後禅刹を再建し梅岩寺と称すとそ

開山阿山春碩和尚 承応元辰年三月十日寂 本堂 十間半 七間 庫裡 十間 四間

鐘楼 二間四方 寺伝云応安の鐘なりしを享保十五年 新鋳に鋳改さるゝ

門 柱間二間 芳林山の額あり 衆寮 七間半 四間半

門内に欅の大樹囲二丈許 樅の古樹囲一丈二尺許 其外古樹大株の雑木生
茂り蓊鬱たる年古への旧刹地なりし

天王神社 山口領堀口村往古より奥州街道の辺に鎮座 勧請の年月不知 社地杉樹
蓊鬱と生茂れり 村内正福寺末之

祭神 素盞嗚尊の神像也 又云速須佐雄能神とも云 一書には進雄尊
或曰武塔天神

神躰 手に斧を提持し立せ給ふ 銅像是巨旦か族を討滅し給ふ威霊の像 長七寸
許 此神異像にして年を経たる 村中の鎮守なり

社 三尺に二尺 上屋 二間四方 拝殿 二間三間 木華表 柱間九尺

社地凡五町歩余 祭礼六月十五日也

正福寺 堀口村にあり 金剛山と号し 鎌倉建長寺末なり
御朱印寺領拾石

本尊正観音 木地像 開山心月禅師 文永中示寂

開基 北條相模守平時頼

佛殿 五間四方 本尊千躰地蔵を安置し 長七寸或は五寸の小像なり

寺伝より当寺は北条時頼開建にて本堂並法堂皆時頼の創建なりしが
昔年回禄の災に罹て只此仏殿のみ時頼造営の儘なりといふ

客殿 庫裏 鐘楼 門 寮

貞和の碑 上は梵字 其下に光明真言 貞和五年卯月八日 帰源逆修

此碑堀口村内小流の川に架して橋となせり 昔年村内何方に在し歟不詳
長サ九尺巾二尺余 村内往来の橋なり 覗き見れば梵字並に銘かすかに見ゆ
里俗に云此碑は新田義興の逆修の碑なりといひ伝ふれとも其事実を志るし
古人呼て経文橋といふ

元弘の碑

此碑ハ野口村永春菴よ在近きひ近狭山の中腹小石碑も菴室も在し也五六十年前よ村内徳蔵寺といふ境内に引移し永春菴も同徳蔵寺へ移ひといふ田地よ永春菴の除地境内の跡なり

梵字

飽間斎藤三郎藤原盛貞生年廿六
於武州府中五月十五日令討死
元弘三年癸酉五月十五日 敬白
同孫七家行廿三同死飽間孫三郎
宗長廿五於相州村岡十八日討死

勧進
執筆遍阿弥陀仏

長サ三尺六寸　巾一尺四寸五分　厚サ二寸

此所より地ニ入

将軍塚

野口村と久米村の界にて狭山の上に細在を見を限とし此塚ハ久米の地なり元弘中よ新田義貞大旗を建らし塚なとそ

八国山

同村小名狭山の内なり一説のよし訛ありよしにて山々を望む所へに名とせり上野赤城山下野日光山常陸筑波根安房鋸山相模高澤山駿河富嶽信濃浅間山甲斐郡内の峰と

南秋津村

八塚川を隔て入間郡よし秋津村あり其所をハ北秋津と唱ふ両郡に相向ひて同名なるハ古へハ一村なりし事よそ又北秋津ふも不動在て霊験ありとて村民詣するもの多し或云此不動尊ハ古村の内古へハ一不動なりしより不動ありにて日本武尊を祀る事なり秋津といふハ訛りにて武尊東夷の為よ欺きかひ此所小火を附て武尊を焼んとせしハ当所なりし此辺へに近かりより以て師火当をいふ所さなり

秋津ハ焼津の訛せしなりとぞ此説も古へハ一区にはして相模国なりとも云ひ又駿河小焼津の地在て焼津神社と称するもありり参考太平記にも小野火を以て当を焼んとせし武蔵野の内なりと記すもありさまに其正否詳ならねハ只其儘へを記するなり
又一説小弘仁九年文室朝臣秋津といふ人武蔵守となり其後十五年を経て天長九年正月武蔵守に任し翌十年又月悲田処の事を奏して其営造の功を給はりしとし其名を称し事なとし行きを支より年経て国司の徳を慕ひ此地村名となりしとて流よ地の名とハなりきとぞいふ一説もあり

不動森

南秋津村にあり本社浅間木像石水盤石燈籠あり不動堂の後より清泉出て其所よ弁天社を安置せり本尊不動明王立像也へ厨子を開く事なしといふ土人云此社地ハ元弘の戦ひよ新田左中将床几を設け本陣の不動の像を樹の枝よかけ暫く祈念し其後不動を安置し奉り夫迄へ多くの人参を建ひとも土人の傳へなきにも其前より此所よ社地在て日本武尊を祀りし事あり不動へ社を建る謂ハ日本の不動を慕ひ且ハ征罰の祈念をせし事なり不動よ祈りけるは日本武尊を祀り村民崇め荒人神と崇敬をし中其後慈覚大師当国下野赴賀へ叡山より下向の次村民等大師よ乞ふて荒人神の尊像を安置せり尚也願ひあれハ大師不動の像を彫刻しこそ是を以て武尊を祀りけるよし不動よ社を建て謂せしより始せりといふ
旅の不動も支よなきるなし

悲田所

此寺ハ入る多摩の郡にて国府より上野下野往来せる事上古よりの道之云ふにも武蔵野の曠野にして旅行の者中路よて疾病等の旅人ある事小て難儀たるに依て此堺よ悲田処を設て公私その悲ひ旅行人為小遁たる事之

入る多麿の堺にあるいは是の事なり武蔵国府より此筋へ出て往来する事上
古より上野下野へ至るハ国史などにも見ゆ（傍注に記千案におよ旬の旧跡なき）
も去りと可知事なし頃ねこ此所より出き

續日本後記云

仁明天皇天長十年五月丁酉

武藏國言管内曠遠行旅多難公私行路飢病者

仍於多磨入間両郡堺置悲田処建屋五宇以従五

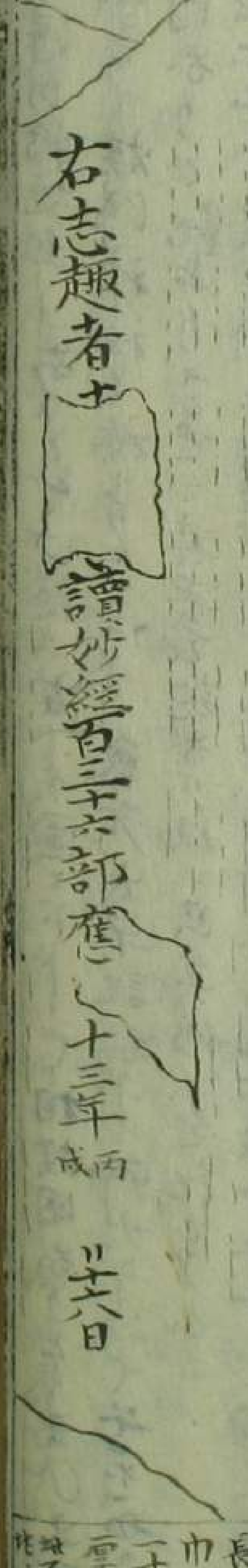
位下當宗宿祢家主以下少目従七位上大丘秋主已

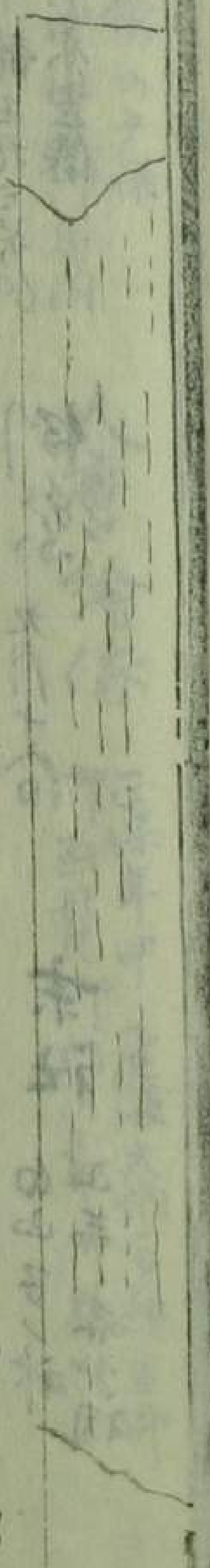
上六人各割公廨以備飼口之資云云

應永ノ石碑

廻り田村光明院境内入口よ行り法華経供養塔也其中に梵文左右に

建立僧俗男女の法名或ハ俗名信心の施主こゝたゝたり碧板石なり





應永十三年也此石碑土中より出る所也郡地中の深サ不知

圓乗院

山号須(うし)渋ヶ谷村ニ行り古刹なれども由来不知
愛宕山東円坊醫王寺といふ真言新義一石神井村三宝院末

薬師如来　中古不動等を以本尊と立此薬師ハ厨子入堂内に安置は
木立像八寸許　恵心作

開山賢誉法印　平治元卯年二月八日寂

一 正和二年　午九月十六日　古石塔婆一基碧礀石板碑渋ヶ谷村小名林と云ふ所に在今ハ
慈師権現に崇

一 應安三年三月　渋ヶ谷灘邑宅福村に在
石ハ前にいふ石に同し

陣屋跡

一 渋ヶ谷村ニ行り文禄年中逸見某に縁ひ住居の跡なりといふ今ハその
家絶たり又灘村草窪村にも陣屋跡といふあり是ハ先年地頭酒井桜ゝ助
といふ人住居の跡なり
逸見氏ハ小泉安房守(氏邦ヵ)の臣にて天正十八年相州小田原にて戦死せし四郎左衛門
氏久か子にて小四郎左衛門義次といひ其子源吉といふもの
御蔵家に属しまへる者なり

小澤池

宅部村小名なり此村ハ湯ヶ谷清水畑ヶ田の三ヶ村ハ高きなりや なり
或云 古澤池といひ狭山後北の溪間なり

土俗云此池ハ狭山の谷合にあるなり 往古ハ狭山の池と号洗るハ是なりと
いふ其説未詳 此池蓴菜多し美味なし食すへきものなり 和名
ぬなは 蓴と云ふ

一 蘇敬か本草注ニ自三四月至七八月通名絲蓴味甜軟
霜降以後至二月名環蓴味苦澁

芋窪村

山口領なり 往古ハ井野窪と唱へしなり
何もの江よりか芋窪と文字の御しくたるよし 村内の小名に石川といふ地あり 村
の北方にて狭山の浅きの山之麓か二町程あり 往古此処に石川入道といふ者住居せし
跡なりといふ馬場の跡あり 年代不知

鹿嶋太神宮

芋窪村ニあり 神主石井氏
御朱印社領拾三石 社地一万三千六百六拾四坪余

本社 幣殿 拝殿 神木槻 圍二丈二尺四寸 南澤櫻 古木ハ朽枯て今ハ若木なり

神躰 龍王丸と号し 木立像 例祭 九月十九日

末社 白山 子ノ神 山王 各小祠

神宝 錦の戸帳 神祖君御寄附 人麿繪像 正保年中 尾張大納言頼宣卿御画賛御持の節御寄附

社頭 鐘銘 此鐘の銘に上奈良村と記せしハ建武の比ハ上奈良橋村と号せしにや 数百年前の事なれハ詳ならす 此鐘四五十年已前に盗の為に失しとこそ
可惜事なり

奉撞鐘一口
鹿島太神宮 神前
建武三子年三月十二日
井澤三郎源光義妻 白敬

古棟札二枚

人王百四代 後土御門院御宇
奉建立鹿嶋大明神社檀一宇
文正元丙戌十月三日
本旦那 原 憲光
別当 若満命師
大工 次郎三郎

人王百六代 後奈良院御宇
奉建立鹿嶋大明神社檀一宇
天文三歳甲午十一月三日
大旦主下総往 工道入道
別当 梅満命師

社傳云當社者慶雲四年丁未武藏國に鬼神来る時常陸峯にて鬼神鎮免するに今廉清の艮の方二町に有 六本松といふ御陣場と言傳ふ天智天皇第四の姫宮又蘇我山田石川麿を中人建立也今祭禮に獅子舞有其獅子の頭三面あるを用ゆ是ハ鬼神の頭三面にして身長一丈六尺ありし鬼神なり是を鎮免するに古例之とそ

慶性院

芋窪村白部山醫王寺といふ眞言新義中簽村眞福寺末なり
起立ハ元亀二年 本尊薬師如来 木立像一尺六寸 行基作
開山ハ第秀法印 慶長六年十二月廿八日寂

観音堂

同村にあり本尊如意輪観世木坐像九寸許 行基作

村山郷

村山と号する郷名ハ古き事にて治承養和の頃より唱へし地名へ右大将頼朝公義兵を揚られし比も村山黨は味方に来り治平の始に恩賞をふをし事古記に載たり村山と号する所ハ大概狭山の麓の山附東ハ野口久米川邊より西ハ箱根ヶ崎辺を村山といふ往古より唱へ来る地を領する人にて村山黨といひ号したるなり夫より三四百年を經て山口氏の人入間郡に住し子孫居城せしより又中古ハ山口氏々所領の地なるにや村山郷山口領と称し又ハ村山の号も唱へ従ひ山口領と号する地になりし なをそ往古山口氏の人も村山氏よりおこて入間山口に住せし今地名をもつて氏となせり又云村山をいたる人と多く入間郡に住すれども其号は村山黨といふ中也今も村山といふ地ハなけれども十里に十ケ村も連なりたる所にて其地を唱へし村山と云なり

村山黨之祖

村山貫任といふ人始て此地に住居してより子孫村山を以て氏とし此人ハ桓武平氏上総介忠頼より四代の孫也村山貫任の孫より数家に分流すれ共村山氏住居の地邸跡不詳

東鑑云
治承五年五月十六日村山七郎頼直本知行所今更不可有相違之由被仰出云云

村山支流

村山七郎頼直より分流し多摩郡住居の人にいおく各入間郡に居住せし是を村山黨と称して頼朝卿関東に旗を揚られしより御味方に属せし事東鑑或ハ盛長私記并其外盛衰記諸書に志るせり又元弘建武之年にも武蔵七黨の内にて村山黨と称じ其分流の家とハ

村山 多摩　大井 入間　宮寺 同　金子 同　黒　須黒 同
久米 入間　仙波 同　廣屋 同　荒波多 同　難波田 同

此家々分流の始祖の事ハ入間郡の其地に附て記せり此人々の子孫小田原北條に属し天正年中迄其流を相續せしもおほし

中藤村（なかとう）

此日頃こいひし村山郷と唱ふ是より西の方へ管根崎辺古き御名を聞ゆ

此村ハ文明九年太田道灌川越より押来り十日余当所ニ陣をすへたるハ此村内真福寺に宿陣せしといふ

鎌倉大草紙云

文明九年三月十日河越より二の宮の城へ押寄攻寄せハ敵大石駿河守憑み景春ハ二宮を落て成氏の御陣成田へ参る太田道灌ハ村山に陣し當所國書放同六年を大将として奥三保（是ハ津久井縣上川尻の邊をいふ）へ馳向ふせ敵本間近江守海老名左衛門尉甲斐国鶴瀬の住人加藤か波多塚の玄九日廿四日送寄ニ責来る是を真先ニ進ミ海老名を初として敵数多討れ道灌も村山の陣より押寄られに敵ハ敗軍しけるを追かけて甲州の堺を越て加藤か悪害へ押寄鶴川といふ所を放火して同廿六日に村山の陣所へ引返せしといふ

真福寺

中藤村龍華山清浄光院といふ真言新義醍醐三宝院末なり御朱印地二拾石を附らる末寺九ヶ寺あり

本尊薬師如来 木坐像八寸 開山流法法師 正応三年十二月寂

古石碑 正応三年十一月 此石碑当寺開山の碑也十一月の下ハ摧きたり 巾一尺八五寸長サ五尺許

撞鐘銘文 寛永十八戊寅年三月鋳 住持 頼栄法印代 本願主 市野孫左衛門尉貞継 此市野氏ハ小田原小條家の旗下の士なり

寺宝 不動尊像 一軸 弘法大師筆 毘沙門天 一軸 興教大師筆

薬師堂 本尊薬師如来木立像厨子入作不知 小條氏照の息女於寿免の方守本尊なりといふ

古断碑 延文元年八月十六日 此碑石ハ村内観音堂の地内にあり

貞治 康永 宝徳 康正 此古石碑ハ村内十王堂の地内にあり

蛇堀川（志やぶり）

村山郷山口領三ツ木村より志やぶりといふを俗に誤りて蛇堀と唱へ此所の小名となり本村より南へ武蔵野の方へ入る事三町程ありて古へより皆の池の下流にて此辺より皆の池までは拾四五町も西よりて往古皆の池にて大蛇を殺せし者ありて其地の血ながれて赤く水染せしより蛇堀川と唱ふるよしその蛇の渇きは皆根ヶ崎村の条に記せり

又此川筋往古より小流ありて東の方へながれて末は武蔵野へ出て末流は廣瀬の野水となり元和三年秋洪水して此辺ニ府中へ押流され高安寺境内の観音堂残此時流亡せしとて今ニ境内へ移されしと彼寺にて記年を誌へり近き比は玉川上水の助水となり水源なる皆の池をも掘浚して三四月比より秋に至るまで水の流ありて此地より田無町も東へ流れ梅川村小川村の辺にて玉川上水へながれ入又云玉川上水の筋は此蛇堀の川跡なりといふ

編年集成云

天正十八庚寅年以来参州の住士大河内助ヶ由左衛門忠政か嫡子大河内又次郎正勝武州多摩郡三ツ木村二百五拾石を領すといふ 于今采邑なり

此人始て当所に土着せし時は今の中藤村長円寺に住居せしよしを伝ふ

村山

郷入間の須近は岸村殿ヶ谷村石畑村皆根ヶ崎村と四ヶ村の惣号を村山村とて一区なり寛文八年御縄の節検地帳一帳にして表に村山村と記せり是より四ヶ村となりたるよしいふ今は山口氏村山郷といへり

村山黨并山口氏略系

- ○頼任 村山貫主
  - 頼直
    - 家綱 大井五郎太夫 大井ノ祖
    - 家平 宮寺五郎 宮寺ノ祖
    - 家範 金子六郎 金子黨ノ祖
    - 家継 村山七郎 山口ノ祖 後山口七郎トモ号ス
      - 季継 山口二郎 山口ノ祖
        - 季信 山口太郎 系畧之 子孫数代山口氏ヲ称ス

家俊 山口六郎 須黒ノ祖 廣屋ノ祖 久木ノ祖
　信景 山口三郎兵エ尉
家信 仙波七郎 仙波之祖
　某 荒波多三郎 荒波多ノ祖
　某 大井太郎 大井ノ祖
高範 難波多小太郎 難波多ノ祖
　某 難波多小太郎
　某 難波多弾正
家忠 金子十郎 金子ノ祖
　家高 大蔵允
　時家 太郎
近範 金子与一 子孫金子氏ヲ称ス
　近吉 太郎
　範景 太五郎

善聖寺

岸村にあり 岩清山と号ス 済門 榮崎村普済寺末なり

本尊阿弥陀如来 木坐像二尺 行基作

開山恵三律師 寛正元庚辰年八月廿五日寂

観音堂

本尊正観音 木立像 三尺許 行基作

一 文明九年太田道灌此地村山より宿陣ありし時よめる

武蔵野の小川の清水堂へきして岸の根芹を洗ひこそすれ

此歌信せしより此あたりの村名を岸或は清水又小川なとゝ名附たりと土人傳ふれとも此事さたかならす此辺の小川村といふは御入国の後小塚孫兵衛の頃より開きたる地なり清水古寿よりして往古より名附たるといふは誤なり

殿ケ谷村

村山四ケ村の内なり 此地に式内阿津佐美の神社ありと傳へけれて又村名を殿ケ谷と唱ふるは往古村山氏元祖より住居せし跡をも傳へたと又文に小宮氏の弓矢師の子孫清水源右衛といへる先祖より住居し村山押掛を製せり今は公の御用をまりて製し来れりといふ

一 村山系圖を按するに元祖村山頼任より三代村山七郎家継といふ人あり此家継迄村山に住し後に入間郡山口へ移りしより山口七郎と名乗る

これを是山口氏の元祖なり此人の子三人ありて兄ハ二郎季綱といひ弟ハ
六郎家俊三男七郎家信といひ夫々子孫数家に分れ嫡家ハ代々
山口を氏とし連綿としてこゝ又ハ入間の内に居を構へて領承とせし
より村山を改めて山口と名乗るものハこの時より後に山口氏を唱ふるなり

阿豆佐美（あづさみ）神社　此社ハ神名帳に載る多磨郡の古社
八座の内なり神主宮崎氏社地ハ村の中程山際にあり
社地狭山の尾に宮居あり延喜式に載する古社なれども今ハ小社に位階を授け
なりし事も国史に見えたり

祭神　少彦名命　杵門に神輿なく白幣あり岸殿ヶ谷石畑三村の鎮守
例祭三月に日中にの百姓を催し神楽を奏す
御朱印社領十二石外に社地境内除地を
本社　南向二方　拝殿　二間に五間　木華表　額石階十段中九尺余　大門道一町半

古社なりとも古き事伝へ不知棟札なとも見えぬ此苗郡中にて外村小同名を称する
社地もなく此所をとりし其内八社の内なる神社よりて同名を近村まて称するもの二三ヶ所
ありとも武蔵野新田の内砂川村又ハ小砂川新田なとに此神を勧請して村内鎮守神
となす是ハ其地を開墾せし人此所の隣邑岸村より出てひらきたるゆへ其地の
鎮守たるを以て称しなりとのなり是も数百年の星霜を歴しなれハ何地か本所
を失ひし所記なり

福正寺　石畑村より行り金鶏山と号し臨済宗鎌倉建長寺末なり
客殿　庫裏　観音堂　表門　鐘楼
開山　勅諡普照大光国師
観音堂　本尊観世音木坐像一尺三寸作不知　表門を入て正面にあり
此観音ハ最初より寺本尊にて霊験の尊像なれハ外に堂宇を建立し安置し
寺伝云此観音再興の旨趣臺座三重めの裏に書付けるよし其写此寺にあり村山土佐
守家元本領職中吉岡采女正行村山将監助と記しあるといふ

其銘文

就大破謹奉梅室慶香庵元再興者也
當寺旦那村山土佐守同施主雲峯
俊慶庵元殊者為二親佛果次現世安
隠後世生善処也
于時　天正十八丁亥年霜月十八日

筥根崎村

此地より村山郷の西ヶ堺りに又函崎とも書す
驛次なり

街道

八王子より是迄あり 南ハ拝島へ二里八丁 北ハ入間郡二本木村へ十九町
江戸より成木村街道あり 小川村へ三里 七日市場へ一里十町程
脇往還ハ青梅へ二里 砂川村へ一里
村名を筥根ヶ崎と号するハ 當所に狭山之筥の池と称する名所ありて 民居の地彼池に
接して居地とする故に筥根ヶ崎と号すといふ
或云筥の池を狭山ヶ池ともいふといへ共 浅ヶ谷村の池ハ狭山ヶ池なりしともいふ
此地筥の池ある事ハ疑ひなし 又云狭山といふもの此地より御林山あり 山上に三社権現
の祠あり 漸く高サ一町歩ともなし 其余ハ高からぬ土山にて二本木辺に接する山を
狭山といふなと東の方へ二里程横よ伸たる山ハ狭山にあらず 是ハ向ヶ岡なりといふ此説
いかゞにや信ずらん

筥の池

街道より西よ行り一町ばかりを隔てあり 一名ハさやまの池といふ
此古ハ大池にて凡九丁九反十三歩程なりしが今ハ水涸て茫々たる芝生の地にて葦葭
も生せしに 其中に二三ヶ所凹の地ありて四邊の草も湿地の腐草なり 岸より見するに萬
頃滿流ともして古への如く面影なり 村の方に方四五十歩の溜水あり 是ハ今に
宮命にて玉川上水の助水の為に古池を堀渫ありてより四時絶る事なし 四五月頃
より七八月頃の間ハ雨水溜へ玉川上水へ流入此地より村山郷中の陸田の灌ぎを流て砂川
村小川村の為にて玉川上水へ入たり

元正天皇の御宇河内国丹比郡小狭山の池を築きたまふよし本
續日本紀に見へ侍へり又ハ後万の古詠なる歟わきかたけれと同名
なるをもて此処にも出せり

古今六帖
恋すてふさやまの池のみくりこそひけハたえすれ我やねたゆる　よみ人しらず

夫木
春ふかみ狭山の池のねぬなはのくるしけなくかはつなくなり　藤原仲実朝臣

新拾
涼しさもむすふさやまの池水にみくりも夏のゆくを待らし　藤原定家卿

千五百番歌合
ぬるこなるし さふき雲まよひつゝみれて池のみくりハ朽ぬへし　藤原季経卿

夫木
みくりくるさやまの池に便よしかけつひかれぬ青柳のいと　藤原為祐朝臣

夫木
行やらぬさやまの池のせきいれをこれもみくりの習ひそてく　卜部兼直宿祢

小町記り
佐やまなるいまのみくりの絲よしくるとうちはへ人のくるを待そ　藤原光俊朝臣

氷とし汀の柿朧ふとなてりさやまの池の付はち跳かも　寂恵法師

夫木
冬ふかみ冬の池へを朝行きて氷のうへみつえぬ人そなき　知證法師

圓福寺

管根ヶ崎村にあり 小小山といふ 臨済宗建長寺末
寺領拾石 天正元年記之 開山梅室和尚

此寺往古は殿ヶ谷村にあり 河辺佐焚神社より南に田畠あり旧地なりといふ
又云旧地の辺の小溝ありて小橋を此名を小小橋といふ 開山梅室和尚といふは天文弘治
の比殿ヶ谷福正寺の住職なり 夫より此寺を草創して此地に移りたる時代不知

蛇喰次右衛門

往古管の池に水溜へあるに此村の百姓次右衛門といふものの或時炎暑の頃管
の池に行て水中へ入て涼したるに何とも不知次右衛門か浴せる所へ甫るゝと
見えしか小蛇一疋擲付たり 次右衛門は中来車にて赤裸なるまゝを立往方反をなさんと其
手に放さんと欲すに纏を小蛇は締るゆへ平日剛強の者なれは蛇を喰切たるに須臾に池
中の水紅にあり空くなりて鳴動ましかは次右衛門は早く我家に帰りけるに此地は年を
経て管の池に住たりし次右衛門か為に退治せられ其血の流れしより暑三伏の頃
此池水の下流を蛇塚川と名付たり 此管の池も蛇死けるより形洞となりといふ 而して
次右衛門か子孫今管根ヶ崎村にありとぞ

加藤景忠墳

管根ヶ崎村日光街道より一町程西の方田圃の中に塚あり 周囲六間許
高五尺程 其上に欅の大樹一株あり 此塚の傍に小祠あり 近き頃より
景忠か霊を祀りて加藤八幡と号す
加藤丹後守景忠は甲州武田家の臣なり 天正十壬午年四月十一日景忠か室女同嫡子家臣
景次兵部下の士溝口左右衛門 其外家従を連此所へ来り 百姓一揆の為に討死す 右三人の
位牌同村円福寺にあり

真常院殿傑宗道栄居士　景忠
竜光院殿祥室栄久大姉　同室
祥雲院殿廣岩宗誉居士　同息

鍋割と号する太刀 此時佩たるものとて円福寺に在 此丹後守か孫于時甲州郡内上野原村
に住し 代々加藤喜次郎と号し甲曲の弓箭長刀馬具并武田信玄勝頼の文書等所
持せしといふ 此者より当所の円福寺へ家具を寄附せり 又云溝口左右衛門か子孫も上野
原村にあり 今上野原に住する喜次郎か先祖は丹後守か次男千久利丸景顕か子孫
あり上野原のかし 西に丹後守か近代に住居せし城跡あり 上目黒村嫡孫なりとぞ

姫塚

是は丹後守か室を埋たる塚なりといふ 塚廣狭景忠か塚と同し
景忠か古墳より北乃方余りを隔て民居の辺にあり

一 鎌倉大草紙云 甲州の加藤といふは源頼朝卿の御時武田の兄弟にして
安田遠江守義定とて遠江国と甲斐の国を領じし人なり 梶原か讒言
しけれは安田謀反の比於鉢へ申上ける故 頼朝卿大に怒りたまひ則
梶原と加藤か先祖加藤次景廉と二人に討手を仰せつけ 義定は法光寺
にて自害せ 則義定の跡を加藤に領させけるを甲斐国に加藤といふ

4年　月

地名なるハ此加賀入道して妙法房といふ巫者所の地名を後に
在所の名に伝ふ又梶原が末子源太景列といふもの甲州に来り
其苗字と此所の地名に伝へたるなり甲州中郡を武田知行し西郡ハ
逸見氏に領し東郡ハ加賀に領しける後にハ一家に武田将領して
加賀ハ終に武田の被官に成こと

地名になりしハ此加賀入道にして妙法房といふ其居所の地なりしを後に
其所の名に伝ふ又梶原か末子源太景則といふもの甲州に来り
其苗字とし其の地名に伝へたるなり甲州中郡を武田知行し西郡ハ
逸見に属し東郡ハ加賀に属ひしか後にハ一党に武田相領して
加賀ハ終に武田の被官に成ごとく